

戦前期女子高等教育の教育理念に関する一考察

—その特質と津田英学塾の位置づけを中心に—

ママトクロヴァ ニルファル

はじめに

本論文は、戦前期の女子高等教育機関である女子専門学校について、創立期の1900年代初期から量的拡大を遂げた1930年代半ばまでを対象とし、その教育理念の特質を明らかにするとともに、戦前の女子高等教育における津田英学塾の位置づけを試みようとするものである。

周知のとおり近代日本においては、一般的には女性にとって高度な教育は不要とされていたものの、1900年以降は女子英学塾、東京女医学校、女子美術学校、日本女子大学校など、創設時から女子高等教育を標榜する学校が次々と創設され、1903年の専門学校令によって、これらの学校は、制度上も女子高等教育機関として確立していった。それ以降、私学を中心に女子専門学校は量的拡大を遂げることになり、その数は1920年代末に30校を超え、1932年には40校を数えるようになる。

一方、女子中等教育に眼を転じると、1900年前後に高等女学校制度が確立するとともに、男女の性差に基づく役割や職分の相違に基づく「良妻賢母」を女子中等教育の理念とする女子教育観が形成されていた。良妻賢母の理念は、時代の変化により若干の変容が見られるが、その理念は戦前における国家公認の理想の女性像として位置づけられ、女性の生き方を強く規制してきた。

では、このような家族制度下における良妻賢母思想が女性の生き方を支配しようとしていた時代において、各女子専門学校は高等教育段階の女性の教育としてどのような理念を設定したのであろうか。すなわち、本来的に専門学校は高度な専門的職業教育を行う場といえるが、その教育理念は女子中等教育における良妻賢母教育の単なる高度化であったのだろうか、あるいはそれを変容させたものであったのだろうか。さらには、良妻賢母理念を克服し高等教育機関としての独自の理念を設定することができたのであろうか。

このような問題意識から筆者は、女子高等教育機関の草創期に創設され、革新的な教育理念を掲げた女子英学塾（以下津田英学塾とする）の創立者津田梅子の教育思想に着目し、同校の①教育の理念、②教育の実践、③教育の成果などについて分析し、その特質および歴史的意義を究明する研究を構想している。その観点からこれまで、津田梅子の教育思想の特質⁽¹⁾、女子英学塾における教授法⁽²⁾、教育実践の成果⁽³⁾などについて考察してきた。本論文では、これまでの考察を踏まえた上で、他の女子専門学校の教育理念を分析する。そして、その分析を踏まえ、津田英学塾の教育理念や方針と比較し、その中で津田英学塾はどのような位置にあったのかについて検討したいと考える。

女子高等教育に関する主要な先行研究には、天野正子編『女子高等教育の座標』、佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程』、畑中理恵『大正期女子高等教育史の研究』などがある。しかし、これらの先行研究においては個別学校の教育理念の特質についての検証は十分ではない。このような先行研究の現状を踏まえ、本論文では近代日本における女子専門学校の理念的特質を検討する。

まず、佐々木啓子による女子専門学校における教育理念と専門分野に基づいて行った類型化（宗教系、人文系、裁縫・技芸系、医学・歯学系、薬学、その他）⁽⁴⁾の分析結果を参考にして、各グループの中から比較検討可能な個別学校を選択する。具体的には、考察対象を草創期の第1期（1900年～1919年）と量的拡大を遂げた第2期（1920年～1934年）に創立された私立の専門学校に限定し、専門分野に応じた代表的な学校を選択することにした。次に、選択した各学校における教育理念の特徴について考察を行う。すなわち、個別学校の学則や設立趣意書等にある目的、創立者、または建学に大きな影響を与えた人物の教育理念や教育精神、そして教育理念が具体化された主な手段などを分析する。なお、女子専門学校の専門分野の特性についての分析も重要であるが、紙幅の関係から今回は考察の対象としない。最後に、分析した結果を総括することによって、女子高等教育における津田英学塾の位置づけを明確にしたい。

1. 宗教系女子専門学校の場合

ここでは、宗教系女子専門学校として、女子高等教育史において重要な位置にあったキリスト教系女子専門学校の東京女子大学および、その比較対象として仏教系女子専門学校の大谷女子専門学校を取り上げる。

東京女子大学は、1910（明治43）年の世界宣教大会において、キリスト教主義を掲げた女子大学を日本に設立することが決定されたことを受けて、1918年にその設置が実現したことから、同校の教育理念の根底にはキリスト教精神が表れている。初代学長新渡戸稲造による第1回卒業式（1922年3月25日）の式辞から確認できるように、同校では智識よりも見識、学問よりも人格、人材よりも人物を養成することを主な目的としていた⁽⁵⁾。加えて、「犠牲と奉仕」という精神の重要性を説き、これがなければ「人としての業務を全う」できないとして「生涯を通じて守るべき主義」だと説いている⁽⁶⁾。

新渡戸の後を受けて、第2代同校学長としてその発展に大きく貢献した安井てつは、同校の教育的精神の多くはおおよそ創設時の教育方針を継承させるものであるとし、以下のような4点の教育目標を掲げた⁽⁷⁾。まず第1点目は、キリスト教主義に基づく人格教育の重視である。次に第2点目は、カリキュラムの中において体育を必修とした。第3点目は、「Liberal College」としての特質を有することである。第4点目は、学究的生活と社交的生活の調和を重んじるということであり、これは安井の英国留学の経験から生まれたものと考えられる。

以上のように、同校が掲げた教育の理念の軸は教養教育であり、これについて天野正子も「欧米型」の教養教育に特徴があったと指摘している⁽⁸⁾。これは、男性と対等の人格を持った主体的な

人間を育成するという点で、戦前の女子高等教育において重要な意義をもつものといえる。しかしながら、同校が高等教育理念として掲げたのは教養教育であり、専門学校に期待される専門教育ではなかった。

一方、大谷女子専門学校を設立した左藤了秀は、「女子高等教育機関の大部分がキリスト教主義の学校であり、日本に伝統の宗教である仏教の感化は国家および家庭の中軸となるべき女性の教養の上に、顧みられていない現実がある」ことから「仏教信念に基づく感謝の生活を主義として、同校を創設した初志に基づき、女子専門の教育をも、限りなき仏陀慈光の下、清く明るく正しき途へ一層向上させたい」⁽⁹⁾という認識のもとに、仏教主義に基づく日本の伝統的な教養教育と女性の特性に基づく専門教育を強調した。

同校の目的は、設立時の学則においても、「女子ニ適切ナル高等ノ學術技芸ヲ教授スルト共ニ仏教的信念ノ下ニ其ノ人格ヲ陶冶スル」となっており、このような理念は、「宗教」という科目と家政科、技芸科などの学科によって具体化されたのである。このように、同校は「日本型」の教養教育および女性特性の専門教育を主軸とする理念を掲げたのであった。

以上のように、宗教系女子専門学校は、教養教育が教育理念の根幹をなすのであり、キリスト教系では「欧米型」の教養教育、仏教系では「日本型」の教養教育が主に目指された。キリスト教系女子専門学校においては、理念としての良妻賢母は色彩が薄かったのに対して、仏教系女子専門学校においてはその色彩が濃かった。すなわち、キリスト教系の女子専門学校はキリスト教の精神に基づいて、女性の幅広い教養教育に教育の力点を置いていた。一方、仏教系の大谷女子専門学校では、家政・裁縫といった学科などを通して、「婦徳の涵養」が目指されたのであった。

2. 人文系女子専門学校の場合

ここでは、人文系女子専門学校として、女子高等教育機関の草創期の1901年に女性の高等教育を目指して大きな規模で出発した日本女子大学校、および、同じ人文系でも異なる理念と女性像を掲げた実践女子専門学校を取り上げる。

日本女子大学校を設立した成瀬仁蔵は、同校の教育理念として、「日本女子大学校設立之趣意書」⁽¹⁰⁾の中で、「第一に女子を人として」「第二に女子を婦人として」「第三に女子を国民として」育成していくことを明示している。つまり、第1には「心身の能力を開展せしめ、円満完備の人」としての女性を育成することが重要とされ、第2には「賢母良妻」としての女性を養成することが必要だとしており、第3には「明晰なる国家的意識」を有する女性を育成するとしている⁽¹¹⁾。

次に、「一 学校の組織程度及び教育法」の中で、同校の教育方針の主軸となる「智育」「德育」「体育」の3項目について概説している。「知育」については、単なる一般的な知識を授けることなく「広く事物を考察する」⁽¹²⁾といった女性自身の能動的な学習姿勢を鍛える教育であるとし、このような理論と実践を身につけなければ「真正の良妻賢母」となることは不可能であるとしている。「体育」を設けた理由は、身体が強くなければ他の教育をきちんと修得することが困難であるという成瀬

の論によるものである。「徳育」の項目においては、「日本の女徳をして万国の師表たらしめ、日本の家庭をして世界の模範たらしめん」と述べており、「婦徳涵養」を基盤とした教育精神が如実に表れていると言えよう。

同校は、実践的な技芸を磨くことよりも学問的理論を中心としたカリキュラムが組まれていることが特徴としてあげられるが、成瀬の女性の特性を重視するという理念は主に「実践倫理」によって具体化されたのであった。成瀬が考案したこの「実践倫理」は、同校の「教育理念の根幹を占める」科目として位置づけられている⁽¹³⁾。「実践倫理」において成瀬は、女性が道徳上「特性」をもつことから、その「特性」に基づいた理想を掲げ、それを実現し、その実践を習慣化する必要があると説いている⁽¹⁴⁾。

一方、実践女子専門学校を創立した下田歌子の教育理念は、1899（明治32）年に制定された「私立実践女学校規則」に明示されているように、「本邦固有の女徳」を育成しながら日常生活の向上のために「実学」を授けることによる良妻賢母の育成を目的としている⁽¹⁵⁾。また、「生徒心得」として設けた条文の中では、「聖輪」（教育勅語）に則した「高潔貞淑の女徳の養成」を強調している。これより、下田の実践女学校における女子教育の理念は、家庭の中で本分を尽くすという国家志向的な婦徳育成を目指すものであったと理解できる。さらに、その基盤には根強い皇室中心主義があり、下田は、「聖輪」（教育勅語）にそった「貞女の女徳」を強調しているのである⁽¹⁶⁾。

1921（大正10）年には、成瀬仁蔵が考案した「実践倫理」を同校でも取り入れ、日本婦人として必要な国民的意識や女性としての役割を「精神的教育」として教授した。「実践倫理」の内容として、「礼法」や「国体および国民道徳」などがあることから、成瀬のそれと比して、下田の認識には個人よりも国民という自己規定が濃厚であったといえる⁽¹⁷⁾。また、「実践倫理」では下田の『女子の修養』（明治39年）などを下地した、実際的な婦徳の養成が説かれていたとされている⁽¹⁸⁾。

同校の教育理念はカリキュラムの大部分を占めた裁縫、技芸、家政といった科目によっても具体化されたのであり、同校が掲げた教育理念の軸は、婦徳の養成であり、日本女性の徳性の向上と確立に重点をおいたことが明らかである⁽¹⁹⁾。

以上のように、本論文で取り上げた人文系女子専門学校の共通点として、「婦徳の涵養」を基盤とした教育理念が確認できる。しかし、その内容は同一ではなく、日本女子大学校は、化学、心理学、経済学などの科目をおき、家庭と社会との関連性を原理的に追究することにねらいをおいたのに対して、実践女子専門学校は、家政・裁縫・技芸教育に力を入れ、国家および皇室主義を中心においた教育を実践していたのであった。

3. 裁縫・技芸系女子専門学校の場合

裁縫・技芸系女子専門学校として、女性の職業教育を目指して設立された共立女子専門学校、および、単なる技芸教育ではなく女性の教養教育も重視した相山女子専門学校を取り上げる。

共立女子専門学校の前身である共立女子職業学校は、発起人29人全てが東京女子師範学校の関係

者であり、実業教育に関心が高かった点が共通点として挙げられる⁽²⁰⁾。創設者の1人である宮川保全は「女子に適応する技芸職業」に必要な学科を教授することを目的とした職業教育中心の理念を掲げている⁽²¹⁾。さらに、発起人の1人である手島精一も女子の職業教育の必要性に注目し、女子の本分に基づいた「技芸」を修養することで女子の社会的地位を少しでも高め、自活の道を拓くことが可能であると強調している⁽²²⁾。同校の発展に尽力した鳩山春子も、女性としての生き方や女性のあり方を説いたほか、教育精神の核心部分として「誠実・勤勉」を掲げ、技芸教育を中心としていた。

同校においては、「家事」「裁縫」「手藝」といった技芸科目に充てられている時間数は、おおよそ8割を占めており⁽²³⁾、「修身」「教育」などの教養科目に比べると手芸教育に重点を置いたことが明らかでなる。このように、共立職業学校は、職業教育的色彩の濃い女子教育機関であり、特に、家庭の経済を助けるための技術を養うことを主軸としていたことから、「裁縫」や「手芸」といった技芸教育に力を入れていた。

一方、1905年に梶山正式と梶山今子夫妻によって創立された名古屋裁縫女学校（梶山女子専門学校の前身）は、「名古屋裁縫女学校設立の趣旨」において、「従来の女子技芸教育の方法を改善確立」し、それに「女子の本分を完うする淑女となり、良妻賢母たるべきものを養成せんとする」という目的を掲げている。これは、梶山今子が、東京の渡辺裁縫女学校（後の東京女子専門学校）に学び、その深い体験と思索に裏付けられ、実科教育を通じての女子教育・人間教育を提唱するに至ったためと考えられる⁽²⁴⁾。また、1929年に専門学校として設置認可された際の目的として、「高等女学校教育の多方面的修養を基礎として、これを集成完結して、所謂女子の仕上教育に力を注ぎ、婦人の天職たる母性の資格を陶冶向上せしめんこと」を掲げている。梶山は、女子の特性を考慮した実利的な教育を重視し、職業教育を通して、家庭婦人としての資格はむろんのこと、女子が独立自営し得るだけの能力の育成を図ろうとしたのであった。梶山は、単なる技芸教育の重視ではなく、教養教育と実業教育との結合こそが、女子教育の急務であると認識していた。その理念は、本科および伝統的な家庭科という学科で具体化されたのである。

以上のように、裁縫・技芸系女子専門学校は、裁縫・技芸を中心とした職業教育に加え、「婦徳の涵養」が目指されていた。天野正子が分析しているように、この時期に「日本の国民精神」に基づく日本型の高等教育、つまり日本の家族制度にふさわしい「婦徳」の養成を明確に教育目的に掲げる学校が多数出現した⁽²⁵⁾。共立女子専門学校および梶山女子専門学校はこのような学校の系譜にあった。しかし、共立女子専門学校のように、「婦徳」の養成を基盤にしながらも、女性の特性を重視した職業ではあるが、女性の職業教育にその目的をおいたことは注目すべき点である。

4. 医学・薬学系女子専門学校の場合

医学・薬学系女子専門学校として、女性に対する医学の専門分野を開拓した東京女子医学専門学校、および、薬学系女子専門学校の一例として昭和女子薬学専門学校を取り上げる。

東京女子医学専門学校は、1900（明治33）年に創設された東京女医学校を母体とする専門学校で

あり、日本で初めての女性だけを対象とした医師の養成機関である。創設者の吉岡弥生・吉岡荒太夫妻はともに医者であり、吉岡弥生は、済生学舎が女学生に対し門戸を閉鎖したことをきっかけに、女医の養成機関としての学校を創設しようと考えた。

吉岡弥生が、同校において育成しようとした女性は、「医師として、男性に伍して一步も遜色のない職業婦人」であった⁽²⁶⁾。東京女医学校のカリキュラム構成には、倫理や教育学といった教養的要素を含む科目はみられず⁽²⁷⁾、医術開業試験に必要な学科という専門科目を網羅していることが、同校の特徴であった。とはいえ、弥生は女医が家庭を顧みない、職業婦人であることを求めていなかった。弥生の道德観は伝統的な儒教に基づいたものであり、日本の伝統的な家族制度を誇りとしていた。いかなる分野に進出しても女性は伝統的な良妻賢母を目指し、女らしくしなくてはならないと訓育した。全寮制度を尊重したのも家族中心主義を忘れさせないためであったとされている⁽²⁸⁾。

このような、吉岡弥生の伝統的な儒教に基づく道德観は、良妻賢母思想を否定するものではなかった。しかし、女性に認められていなかった医学という分野を女性にも開拓したことは重要な意義をもつものであったといえよう。

一方、薬学系の昭和女子薬学専門学校はどうであろう。同校は、東京女子薬学校を総退学した生徒の援助により設立された昭和女子薬学校と、日本女子薬学校の合併により、1930（昭和5）年に設立認可された学校であった。同校の目的について、昭和女子薬学校の発起人の一人である、中村継男は、女性はその本来の性質からして非常に薬学の応用に適しており、女性に薬剤師の資格を与え、人命救助に役立てるべきという女性の特性に基づく職業観や、国家のために尽力したいという見解を述べている⁽²⁹⁾。また、発起人の高木正年は、「健全なる職業を持った婦人によって健全なる家庭が建設されて始めて国民衛生といふ事も行はれるのであります」と述べ⁽³⁰⁾、職業を持つ健康な女性の家庭および国民に対する役割を強調している。

同校の学科課程においては、医学・薬学関係専門の教科以外に、修身や国文に加え、家庭科学、法制経済などが設けられており⁽³¹⁾、同校の理念を具体化するために十分な内容となっている。これは東京女子医学専門学校との大きな違いであった。

このように、昭和女子専門学校は、女性に薬学の専門知識を授けただけでなく、女性が家庭においてもその能力を発揮できるよう、家庭において必要な知識を教授した。このような教育理念は、良妻賢母思想が反映されたのであり、カリキュラムの中で具体化されたと見られるが、女性に対する新たな職業の分野が開拓されたことは評価できよう。

以上のように、東京女子医学専門学校、昭和女子薬学専門学校は、その名称から明らかなように女性の新たな職業の分野を開拓したことになる。男性の分野とみなされていた医学、薬学教育を女性にも与え、男性と同等な専門家を養成したことは特筆すべき点である。一方、これらの学校が推進した教育は、女性の生理的・精神的特性や、女性としての家庭および国家に対する役割と責任を否定するものではなく、専門教育と同時に、倫理や家庭科学の教育も授けたのであった。特に、薬学系の女子専門学校の場合に、その傾向が強かったのであった。

5. その他の場合

ここでは、その他の専門領域の学校として女子美術専門学校を取り上げる。同校の前身である女子美術学校は女子高等教育機関の草創期の1900年に創設され、女性に対する美術の専門分野を開拓した学校である。

女子美術学校は、唯一女性の入学を認めていた工部美術学校が廃校となり、東京美術学校が女性に門戸を閉鎖していた状況の中で、藤田文蔵、横井玉子、田中晋、谷口鉄太郎によって創設された。同校の発起人の内、最も積極的にこの計画を推し進めた横井玉子は、新栄女学院に奉職して以来、16年間を女子教育者として過ごし、その中で、女性の地位向上と自立のために女子の学校を作ることが不可欠だという信念と決意が固まり、女子美術学校を創設するに至ったのであった⁽³²⁾。

1900（明治33）年の学則にあるように、同校の目的は、芸術家及美術の教員を養成することにあった。女子美術学校の「設立ノ趣旨」には、女性の地位向上論の考え方が存在する一方、女子の特性論、つまり女性の生理的・精神的特性または社会的役割に根拠を求める考え方も窺える⁽³³⁾。しかし、良妻賢母親のもとで女性のための教養教育をめざした女子専門学校に対して、女子美術学校は、女性教員・女性芸術家という新たな職業専門教育を志向した⁽³⁴⁾ことが注目に値する。

一方、同校のもつ女性の芸術教育という高い理想に対する世間の批判も根強いものがあった。第一に婦徳を考えていた当時の人々に、新しい女子生徒の生活態度がすべて「墮落」と映った。それに対して、藤田文蔵校長は、単なる女性の芸術家を養成するのではなく、一家の主婦および子どもを養育するにあたってそのような女性の特性も同時に育成するのだと説き⁽³⁵⁾、この点は1911年改正の同校規則においても明記された。女性の職業教育を主な理念に掲げ、教員養成を目的としていた同校は、社会の要請により、その目的が大きく変化しようとした。これは、毎年の卒業生数で確認できるが、1909（明治42）年をみると、「裁縫科」卒業生が圧倒的に多く、「刺繍科」、「編物科」がそれに続いていた。日本画、西洋画、彫刻などの卒業生はごく少数であり、ここからも社会がいかに「女性らしい」職業や技術の習得を求めていたか、容易に想像できる。

以上、専門分野別に女子専門学校の教育理念の特質を考察したが、良妻賢母主義の理念をまったく否定する学校は存在しなかったといえる。しかし、教育理念の重点の置かれ方に相違があり、これは重要な点としてみるべきと考える。つまり、良妻賢母の理念を中心に掲げた学校もあれば、二次的な理念として位置づけられる学校もあった。また、時代の要請や学校の経営などを考慮して、その理念を取り入れた学校も存在した。

以上の考察を踏まえ、次に津田英学塾の教育理念の特質を検討し、戦前日本の女子高等教育における同塾の位置付けを試みることにする。

6. 津田英学塾の場合

津田英学塾は、1900年に東京女医学校や女子美術学校と時を同じくして創立され、女子高等教育

機関の草創期に設けられた学校として重要な位置にあると考えられる。創立者の津田梅子は、2回にわたるアメリカ留学の経験から、日本社会における女性の教育機会の必要性を痛感し、自ら女性の高等教育を開拓しようと決意し、同校を創設するに至った。その教育理念も独特で斬新なものであり、ここでは、その特徴を明確にしたいと考える。

津田は、同校の主要な教育理念として3つの目標を掲げている。これは、1900（明治33）年制定の「私立女子英学塾規則」に明確に表れている⁽³⁶⁾。第1は、「英学を専修」することであった。これは、同塾の掲げる基本的方針として位置づけられる。女性が外国語を修得することは、自立的手段の獲得という実益に結びつくだけでなく、人間形成過程における思想的、倫理的な教訓を得ることができ、さらに国際的感覚を養うことで、あらゆる物事に対して幅広い視野を持てるという、津田が理想とした女性像の具体的な要素を示すものであった。また、第2は、英語教員を養成することであった。津田は、男性だけでなく女性も社会において活躍し協調して社会の発展に寄与することが重要であるとの認識から、日本女性の社会的活動分野を開拓することが望ましいと考え、英語教員としての女性の社会的、職業的地位を獲得することを目標に設定したのである。最後に、第3として「家庭の薫陶」を重視することであった⁽³⁷⁾。これは津田が、同塾の生徒と日常生活を共にすることによって、生活の中における教育を行うことを意味していた。

同校の教育精神について、津田は「開学趣旨」の中で次の4点を挙げており⁽³⁸⁾、同校において目標にした高等教育の特徴が読み取れる。1点目は、「教師の資格と熱心と、それに学生の研究心」が「真の教育」において必要不可欠な要素であること、2点目は、「生徒の個性に従って別々の取扱い」をする、個性重視と少人数教育の必要性、3点目は英語教員の資格を取得させ、独立可能な職業婦人を養成すること、4点目は、「完き婦人即ち *allround women*」の育成であり、専門以外の事物についても多少の理解を持つことであった。

また、津田は日本の女性に自信と独立心が欠けていると痛感していたことから、「精神力を鍛錬し、決断力を養い、意志を強くして自主的に思想し行動し得る」存在に女性を変えていかなければならないと考えていた⁽³⁹⁾。津田は「自主と自発性」に基づく責任感を非常に重視しており、同塾の理念を超えて人生の精神的教訓として心得ていたと考えられる。

そして、津田の教育精神の根幹をなすものとして、人格主義に基づくキリスト教主義の色彩をもっていたことに注目したい。津田は、同塾内において宗教色を表出させることを望まなかったが、「人格の接触によって完うせられる教育」⁽⁴⁰⁾を信念としていたことから、キリスト教的精神に基づく学校生活を作り出すことを目標としていた。

このように、津田は英語の専門知識はもとより、英語教育を通して高度な教養の教授を目標に掲げ、社会で能力を発揮できる自立した女性の育成を目指した。では、他の女子専門学校と比較した場合、津田英学塾のどのような特徴が明らかにできるのだろうか。

同じく教養教育を目指した東京女子大学や日本女子大学校と異なる点を確認すると、まず津田英学塾は職業的資格を身につけることに重点を置いていた点に大きな特色があった。たとえば、東京女子

大学が目指した高等教育は、職業に就くためのものではなく、あくまでも教養教育に留まっていた。次に、津田英学塾が、英語教育を通して国際的な感覚を養うことで幅広い視野を持てる「オールラウンド」な女性を育成したのに対して、日本女子大学校などは、幅広いカリキュラムを設けながらも、社会と家庭の関連性を原理的に追求する教育や、「徳育」や「実践倫理」を通して「婦徳」の養成に力を入れたのであった。これに関連して、津田英学塾が、日本の家族制度にふさわしい「女徳」ではなく、独立心のある、行動に責任感の持てる女性を育成した点も注目される。

次に、職業教育を目指した共立女子専門学校や、東京女子医学専門学校、昭和女子専門学校との相違点はどこにあったのだろうか。確かに、これらの学校は女性の職業の分野を開拓し、女性が職業に就くために大いに貢献したことは評価できる。同じく職業教育を目指した津田英学塾と比較するならば、津田英学塾は、幅広い見識を養うことを目標にしていたことから、単なる職業婦人ではなく男性と同等の程度に実力をもつ職業婦人の育成に力を入れていたことが挙げられる。これは、英語教育を通じて日本女性における指導者的存在の育成を切望していた津田の理念を象徴する理念であった。また、同じく男性と同等な職業の資格を取得させたい東京女子医学専門学校の吉岡弥生とは、道德観の相違がみられた。すなわち、吉岡弥生が伝統的な儒教に基づいた女性像を掲げたのに対して、津田梅子はキリスト教精神に基づいた女性の自立に力を入れたのであった。同じく職業教育をねらいとした共立女子専門学校と昭和女子薬学専門学校と対比すると、これらの学校が女性の特性と関連付けられた職業や女性の特性を考慮したカリキュラムを設けたのに対して、津田英学塾は女性の特性に特化された教育または職業を推進しなかったことが大きな違いであった。

では、大谷女子専門学校、実践女子専門学校、杉山女子専門学校との主な相違点はどこにあるのだろうか。考察した通り、これらの学校では日本の伝統的な家族に基づく「婦徳の涵養」が教育理念の主軸にあった。これは津田英学塾と対比した場合、明確に挙げられる相違点であった。確かに、津田英学塾においても家事や料理などを寮生活の中で教え、最低限の家庭的な教育は行われていたが、それはあくまでも寮生活を利用して行われたものであり、カリキュラムの中で教えられてはいなかった。また、津田が掲げた女性像は、明らかに「婦徳の涵養」とは異なるものであった。そして、これらの学校が女性の特性を重視し二次的な目標として職業を設定したのに対して、津田英学塾は女性の自立と女性の地位向上を促進するための職業教育に重点を置いた点が注目される。

最後に取り上げた女子美術専門学校は、女性の美術教育ならびに女性に対する高等教育を目指して出発した学校であった。女性に対する美術教育は、革新的な分野であったに違いないが、同校は社会の要請とニーズに目的が変容させられ、同校においては「裁縫科」、「刺繍科」、「編物科」の学科が力を増していったのであった。その点と比較すると、津田英学塾は創設時の目的を貫いたとみることができよう。

以上のように、津田英学塾は当時の女子高等教育にみられた婦徳の養成とは異なり、女性の幅広い見識の育成および職業的資格を身につけることに重点を置いていた点に大きな特色があった。

おわりに

以上、本論文では10校の女子専門学校を取り上げ、その教育理念の特徴を、とくに性別役割規範に基づく良妻賢母思想と女子高等教育の理念との関連を中心に考察した。

戦前期における女子高等教育の全体的な傾向をみると、職業に就くための専門教育よりも良妻賢母となるための教養教育に重点がおかれていたし、専門教育についても、女性の特性および役割に関連付けられていた職種の内容に限定され、良妻賢母思想を乗り越えようというところまでは至っていなかった。特に、実践女子専門学校、大谷女子専門学校、杉山女子専門学校は、「専門」学校であるにもかかわらず、日本的「女徳」の養成を明確に教育目的にかかげていた。この時期の女子高等教育の特徴について天野正子もまた、教養教育よりも「人格」教育が重視されていたことを挙げ⁽⁴¹⁾、「女子専門学校を全体としてみれば、高等女学校教育を支配した良妻賢母主義が、「人格」教育という新しい装いをまとうて高等教育段階にもちこまれた」と指摘している⁽⁴²⁾。このように、女性の高等教育は国家によって支持された良妻賢母主義に貫かれていたのである。

しかし、女性の高等教育は多かれ少なかれ良妻賢母主義に貫かれていたものの、実質的にはさまざまな理念を伴って複合的に展開されており、教育の重点の置き方が学校ごとに違いがあったことは着目すべき点である。本論分の分析により、この時期の女子高等教育機関は、次のように6つに分類できることが明らかになった。すなわち、①職業教育に重点が置かれた学校（津田英学塾、東京女子医科大学、女子美術専門学校など）、②教養教育に重点が置かれた学校（東京女子大学など）、③女性の特性を考慮しつつ、職業教育に重点が置かれた学校（昭和女子薬学専門学校など）、④女性特有の職業に重点が置かれた学校（共立女子専門学校、相山女子専門学校など）、⑤「女徳」の育成に重点が置かれた学校（大谷女子専門学校、実践女子専門学校など）、⑥女性の教養および徳育に重点が置かれた学校（日本女子大学など）である。

このように、各女子専門学校は独自の理念を展開し、女性に多様な高等教育の機会を与え、女性に新しい生き方を示したことは評価すべきである。東京女子大学や日本女子大学などは、女性を一人の独立した人格を持った主体的な人間として育成しようとし、東京女子医科大学や女子美術専門学校などは、医学や薬学、美術のような、それまで男性にしか認められていなかった職業分野を女性にも開拓したのである。また、「婦徳の涵養」を理念として掲げた多くの裁縫・技芸系女子専門学校に関しても、女性の特性に基づくものとみなされていた職種に限定されるものの、職業につく可能性を女性に与えたことも評価できよう。

その中でも、本論文で考察したように、津田英学塾は特殊な例であった。創立者の津田梅子は、独特で革新的な教育理念のもとに女性に高等教育を与えようとした。すなわち、英語の習得を通じて、自立的な手段を獲得させ、人格面の向上も目指し、国際的な感覚を養い、物事に対して幅広い視野を持てる見識ある女性を育成しようとした。また、英語教員を養成することを目標に設定し、男性だけでなく女性にも社会において活躍し社会の発展に寄与する機会を与え、女性の地位向上および社会進

出の方途を具体的に示した。そして、教養や専門知識だけでなく、「自主と自発性」という女性の精神面の向上も目指し、教師と生徒が生活を共にし、人格の接触によるキリスト教主義を基盤とした学校生活を心がけた。最後に、幅広い見識をもつ「オールラウンド」な女性を育成したことから、女性を男性と同等の実力をもつ人材として育成したいという津田の意図が窺える。

以上のように、多数の女子専門学校が、中等教育における良妻賢母思想に基づく教養教育を継承したのに対し、津田英学塾は良妻賢母思想を否定しないまでも、より発展した女性像を描き出していた点が注目される。すなわち、女性としての人格形成はもちろん、女性の自立や地位向上を迫り、高度な専門知識および高度な教養、そして何よりも英語力の教授を教育の目標に掲げたこと、さらには英語教員を中心に女性の職業の途を積極的に開拓したことなどである。このように、教育理念の中心には社会の中で働く女性像が明確に据えられていたことは、他の専門学校と比較することで、その先駆性がより明らかになるのであり、日本の女子高等教育史上、大きな意義を持つものであるといえよう。

このような津田梅子の革新的な教育理念は、津田がアメリカにおいて初等・中等教育を受け、アメリカにおいて形成した人格及び日本女性をみつめる、研ぎ澄まされた「眼力」と日本女性の地位を向上させたい、力強い「意志」から生まれたものであった。さらに言えば、津田が華族女学校や女子高等師範学校において教授した経験から生まれた、日本の女子教育の現状に対する不満によるものであった。この部分に関する検討は課題とし別稿をまとめることとする。

注(1) Nilufar Mamatkulova「津田梅子の教育思想の特質に関する一考察—女性の自立と地位向上をめぐる視点から」早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊、第17号-2、2010年、pp109-120。

(2) ママトクロヴァ・ニルファル「初期の女子英学塾における教授法に関する一考察—津田梅子の目指した高等教育」早稲田大学教育学会紀要 第12号、2011年、pp79-86。

(3) ママトクロヴァ・ニルファル「女子英学塾における教育実践の成果に関する一考察—津田梅子のねらいと初期卒業生の進路」早稲田大学教育総合研究所『早稲田教育評論』第25号-1、2011年、pp107-125。

(4) 佐々木啓子「伝統的規範から脱却した新中間層の女性たち」香川せつ子、河村貞枝編『女性と高等教育』昭和堂、2008年、p207。

(5) 東京女子大学五十年史編纂委員会編『東京女子大学五十年史』東京女子大学、1968年、p47。

(6) 東京女子大学五十年史編纂委員会編『同前書』、pp47-48。

(7) 青山なを『安井てつと東京女子大学』〈青山なを著作集 第3巻〉慶応通信、1982年、p168。

(8) 天野正子編著『女子高等教育の座標』垣内出版、1986年、p34。

(9) 創立六十年記念誌出版部会編『大谷学園六十年』大谷学園、創元社、1969年、p84。

(10) 日本女子大学校『日本女子大学四十年史』1941年、p38「日本女子大学校設立之趣意書」参照。

(11) 日本女子大学校『同前書』、pp39-40。

(12) 成瀬仁蔵著作集委員会編「女子教育」『成瀬仁蔵著作集第1巻』日本女子大学、1974年、p47。

(13) 天野正子編著『前掲書』、p41。

(14) 成瀬仁蔵著作集委員会編「女子教育」『前掲書』、pp92-93。

(15) 実践女子学園八十年史編纂委員会編『実践女子学園八十年史』、実践女子学園、1981年、p74『資料15「私立実践女学校規則 第1条」』参照。

- (16) 実践女子学園八十年史編纂委員会編『同前書』, p85。
- (17) 実践女子学園一〇〇年史編纂委員会編『実践女子学園一〇〇年史』実践女子学園, 2001 年, p149。
- (18) 実践女子学園一〇〇年史編纂委員会編『同前書』, p199。
- (19) 実践女子学園八十年史編纂委員会編『前掲書』, pp58-59。
- (20) 共立女子学園百年史編纂委員会編『共立女子学園百年史』学校法人共立女子学園, 1985 年, pp2-6。
- (21) 共立女子学園百年史編纂委員会編『同前書』, pp21-23。
- (22) 共立女子学園百年史編纂委員会編『同前書』, pp74-76。
- (23) 本科, 別科, 1928 年。
- (24) 椋山学園七十五年史編集委員会『椋山女学園七十五年史』, 講談社, 1980 年, p17。
- (25) 天野正子編著『前掲書』, p39
- (26) 東京女子医科大学『東京女子医科大学小史』中央公論事業出版, 1966 年, p71。
- (27) 東京女子医科大学『同前書』, pp82-83。
- (28) 東京女子医科大学百年史編纂委員会編『東京女子医科大学百年史』【本編】 , 東京女子医科大学, 2000 年, p62。
- (29) 昭和薬科大学『昭和薬科大学 40 年史』, 1968 年, p14。
- (30) 昭和薬科大学『同前書』, p12。
- (31) 「昭和女子薬学専門学校学則」(1933 年 2 月変更認可) 学科課程表による。
- (32) 女子美術大学『女子美術大学八十年史』ぎょうせい, 1980 年, p13。
- (33) 女子美術大学『同前書』, pp6-7。
- (34) 女子美術大学『同前書』, pp8-9。
- (35) 女子美術大学『同前書』, pp31-32。
- (36) 津田英学塾『津田英学塾四十年史』1941 年, p569「私立女子英学塾規則 第 1 条」参照。
- (37) 津田英学塾『前掲書』, p569「私立女子英学塾規則 第 2 条」参照。
- (38) 津田英学塾『同前書』, pp50-52。
- (39) 吉川利一『津田梅子伝』, 津田塾同窓会, 1956 年, p371。
- (40) 吉川利一『同前書』, p374。
- (41) 天野正子編著『前掲書』, p37。
- (42) 天野正子編著『同前書』, p39。